



奉仕・協調・健康

広報

京都大学医学部保健学科



平成 16 年度医療技術短期大学部卒業式

目 次

○新生医学部保健学科の将来に向けて 医学部保健学科長 笹田 昌孝… 2	検査技術科学専攻 教授 船渡 忠男… 9
○退任等挨拶 元看護学専攻 教授 中井 義勝… 4	看護学専攻 教授 成木 弘子…10
元理学療法学専攻 教授 森永 敏博… 5	○平成17年度 医学部保健学科 新入生合宿 研修の報告……………11
元看護学専攻 助手 片山 由美… 6	○平成17年度 医学部保健学科入学試験結果 ……………14
○新任等挨拶 看護学専攻 教授 林 優子… 7	○人事異動……………14
検査技術科学専攻 教授 梅村 晋一郎… 8	○医学部保健学科・医療短期大学部日誌……………15
	○あとがき……………16

新生医学部保健学科の将来に向けて

医学部保健学科長 笹田昌孝

保健学科がスタートして今春に2期生を迎え入れた。そして新しく多くの教員が加わり、保健学科の実体が見えてきたところである。長年にわたって構想を積み重ねてきたお陰で、学生、教職員一同が新しい目標に向かって歩を進めていると感じている。しかしながら、本学の真価はこれから問われるところであり、そのためになすべき課題は多くある。何よりも重要なことは、入学した学生諸君が将来に向けて大きな希望を抱くことができ、そしてそれをかなえるための道筋を教職員と一体になって拓くことである。

日本の医学・医療は大きく変貌しようとしている。これまで目標とした病気を治すことは今後とも重要な課題であり、その具体化に高度先進医療の益々の推進がある。また、生活環境、医療環境、社会構造の変化に伴って疾病構造が変化し、さらにこころの病が大きな問題となり、これらに適切に対処することが求められている。

京都大学医学部はこれらの課題に積極的に取り組み、解決へと導く使命を負っている。とりわけこれ迄京都大学医学部が推し進めてきた高度先進医療をさらに発展させること、そして我が国の医療の進むべき道を明示することを考える時、まず必須と考えられるのが「真のチーム医療の構築」である。医師にすべてを期待したこれ迄の思考ではもはや望まれる医療を展開することが不可能であることが周知されつつある。

さて、真のチーム医療をどのように構築するかその具体化を考えてみると、まずは真のチーム医

療を担う医療人の育成があげられる。この点我が国においては医師の養成はそれなりの歴史と実績を持つが、医師以外の医療人養成は欧米に比べて随分遅れていると言わざるを得ない。その改善を図るために近年急速に整備が進められつつあり、我々の医学部保健学科設置もその1つである。従って本学が望ましい医療人を養成することに対する期待は、実に大きいものと考えている。望ましい医療人を養成するためには、すぐれた学生、すぐれた教職員が必要である。ここで言う「すぐれた」とはどういうことか、これこそ本学の理念の根幹である。幸い今春の入試においても優秀な学生を迎え入れることができた。また意欲に満ちた多くの教職員を迎え入れることができた。このような人材を得たなら、そこに教育と研究を展開することである。そのために教育研究環境を整備することである。まず、前者については若手を含む将来計画検討委員会において鋭意検討されつつあり、また研究検討委員会で具体化された若手研究支援など着実な動きがある。また他学部や学外との共同研究などが拡充されつつあり、今後ともさらなる発展が望まれる。教育や研究を発展させるためには、理念やアイディアが何より大切である。従って今後とも広い視野に立って、そして今後の方向性を的確に把えてゆくことに努めたい。次に教育研究環境の整備の具体化としては教育研究費を獲得すること、教育研究設備を充実することに加えて、教育研究の場としての京大病院が格別の重要性を持つものであり、今後の最重要課題

の1つと考えている。これらいずれについてもまだ満足ゆくものではないが、徐々に歩を進めていると感じている。また、人材を得て教育研究環境の整備を進めながら到達像を描く時、将来の医療図とともに他領域、大学間交流、国際化などの視点を常に持ちたいものである。

本学の将来にとって以上のほかの重要な事項として大学院設置があり、これからの1年の最大課題といえる。幸い私共保健学科の構想が京都大学並びに文部科学省において理解されつつあり、我々が目指す方向に是非展開したいと考えている。

以上、真のチーム医療の構築、研究の萌芽と育成、大学院設置、いずれも本学に迎えた学生諸君が将来において健康科学の発展や医療の展開に希望と自信に満ちて活躍するために不可欠なものである。学生諸君が教職員と一体となって健やかに発展する時、本学が目標とする像に一步前進することが可能となる。その方向に向けて一步踏み出す現在が、本学の将来を決定する重要な時期であることを全教職員が深く認識して望みたいと考えている。



退任によせて

元看護学専攻 教授 中 井 義 勝

退任の挨拶文を依頼されました。退任に際し、ありがたいことに最終講義の機会を得、また数回に及ぶ送別会と退官記念パーティーを開いていただき、その都度挨拶をしました。さらに、大学生生活の思い出話を綴った「memoirs」を出版しました。そこで、この文は拙書「memoirs」の補遺として読んで下さい。

最終講義の後、「医師である先生がどのような理念をもって看護の教授になられたのですか？」という質問がありました。突然のことで、うまく返答できなかったのここにまとめました。

当時、後輩が教室の教授になったため、転出を考えていました。折しも全国の医療短大が大学になる予定で、阪大に次いで京大が4年制になる準備中という情報を得ました。私の所属している心身医学会や糖尿病学会では、チーム医療を必要とする看護師の人たちの発表を聴く機会が多くありました。当時は看護師の研究発表は熱心ではあるが、医師の発表にはその方法が劣るように思いました。私たち医師のように長い研究の歴史が看護には少なかったためでしょう。そこで私は医療短大へ転出し、大学の使命の1つである研究の面で、看護師たちのお役に立てるのでは思うようになりました。

さて平成5年2月医療短大看護学科着任後、12年間の在職中に当初の目標は達成できたでしょうか？着任後4年間は「memoirs」にも書いたように、大変苦勞しましたが数千万円の予算で多用途監視システムを設置し、それなりの研究実績を挙げることができました。また2千万円の大学教育改善費で、短大のインターネット網を新設、メールや文献検索など医短の研究発展に寄与することができました。もちろん、私一人の力ではできず、当時の学長、部長や事務職の方々の

ご尽力のお陰です。しかし、その後は入試や教育の担当が多く、当初の4年間のように看護職の人たちの研究にお役に立つ機会が少ないまま退職となりました。何か大切な仕事をし残してきた心境です。

さて、退職後の近況ですが、1ヶ月間の充電期間を経て、5月9日から烏丸御池中井クリニック(<http://www.nakai-clinic.jp>)を開院しました。自宅からクリニックまで地下鉄通勤です。今までにない体験をし、毎日楽しく過ごしています。地上に出て歩道を歩いてびっくりです。私の背後から自転車に乗った若者が全速力で走り抜けます。危うくはねられかけました。歩道が狭かった時は、自転車もこんなスピードを出せなかったのに。診療所は現在のところ患者数も少なく、患者とも納得いくまでゆっくり対話ができて評判はよいようです。7月からは企業の学術顧問も引き受ける予定です。診療所も軌道に乗ってきたので、研究活動を再開したいと思います。何かお役に立てれば幸いです。



新設された大学に着任して

元理学療法学専攻 教授

(現四條畷学園大学リハビリテーション学部 教授)

森 永 敏 博

古戦場といわれる場所が日本各地に存在する。四條畷学園（中橋清一理事長、京都大学卒）の幼稚園から高校、そして大学のリハビリテーション学部学舎などが散在する四條畷もその一つである。南北朝時代の南朝方で大楠公といわれた楠正成の子で、小楠公とも称された楠正行が南朝の盛り返しを期して高師直と戦い戦死（1348年）した地である。時はすでに足利尊氏の室町幕府の時代であった。土地の人は神社を祀り、歴史を偲んで生活している。我が大学はその飯盛山の中腹にあって、大阪平野の眺望がすばらしい。

京都大学は先年創立100年を記念し大々的に記念事業を行った。小生も百年史の編集委員として諸会議に出席した。お陰で手もとには分厚い記念誌が残った。その永い京大の歴史の中で、医療専門職としての理学療法士（PT）教育は昭和57年に医療技術短期大学部に理学療法学科が併設されたときに始まる。その後まもなく学部構想が打ち出され、学科、大学院構想などが検討されるなどの変遷を経た上でようやく保健学科が誕生するにいたった。学部構想時からの資料が手許に残っているが、読み返してみると当時の状況が窺い知れて興味深い。すでに当時の短期大学部はすべて保健学科に昇格したが、紛れもなく京大が他校に先駆けて4年制を打ち出したことに間違いない。京大のプライオリティーは他校の追随を許さない、と思うのは身最良のせいであろうか。ただ残念なことに実現化は後塵を排してしまった。

医療の高度、専門化に伴って医療専門職教育の高度化が必要なことは改めて論を待たない。しかし理学療法士の場合、全国180に余る養成校で必要以上とも思える教育がなされており、必ずしも高度専門教育化が徹底されているわけではない。むしろ医療職として身分立法されたにもかかわら

ず、医療経済の狭間で介護保険制度などにその職能が流用され、専門性の維持すら危ういという嘆かわしい状況にあるといえる。その中で京大の理学療法学専攻に対する専門領域からの期待は極めて大きなものがある。優秀な教員、卒業生を頭脳・技術集団とした理学療法サービス拡充のためのモデル作りを大学病院などを舞台に展開し、普遍化してほしいと願っている。高度に特化された人材を適所に配置することによって、社会のニーズに対応できるシステム作りが可能になるのではないかと思う。

四條畷学園は京大には及ばないまでも80年の歴史を持つ。本部の建物（写真背景）はその風格をたたえ威風堂々とした歴史を感じる立派な建造物である。その80周年を記念して既存の短大、リハ学科を学部昇格させたのであるが、産声を上げたばかりの新設である。この新興のエネルギーを当面は人材の育成にそそぎ、地盤を固めた後には私学の特長を生かした個性的な大学にしたいと気負っている。

近くにおいでの際には是非お立ち寄りください。



退任のご挨拶

元看護学専攻 助手 片山 由美

日中は、汗ばむほどの気温になりますが、朝夕はいまだ肌寒い感が残っております。

皆様におかれましては、いかがお過ごしでしょうか

このたび、3日31日をもって京都大学を退職いたしました。昭和61年に着任以来、本当に多くの方にお世話になりました。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

いつの時代も、人はその生と死を自宅でと願っているという神話が、近年、覆されつつあります。生も死も多くの方が施設で迎えるという時代になりました。私の子ども時分は、文字どおり、お産も死亡も自宅が主流であり、病院や施設はあまり意識したことがないという時代でした。そんな私が、看護師になりたいと思ったのは、最初はやはり、白衣の強い魔力でした。しかしそれもすぐに、別の対象に移りました。歯が全部、永久歯に生え変わる頃は、すっかり、歯医者さんになりたくなくなっていました。当時、近所には名物歯医者さんがいらっしゃいました。何が名物かと言いますと、その白衣にはボタンは無く、診察と治療の行程の半分はシガレットを吸いながらと、一見不安を覚えますが、「抜歯ィー！」と叫ぶと、あっという間に終わってしまい、痛みを感じる暇さえ無いので。医術や技術というものは、天性は勿論のこと、その経験というのはすごい力があると感じました。短大に着任してから、看護技術を担当していた私は、いまになっても、感服しております。今なら、その技術の成り立ちを、多少なりとも研究的に分析できたかも……。おかげさまで、わたしはいつも、泣かなかったからという理由で、抜歯の帰りには、いつもお菓子を買ってもらいました。しかし、その熱も高校時代には冷めました。さて、自分はどのような仕事をするかという進路決定のと

き、一度はおさまっていた「看護師」が、自分のなかに、また沸いてきました。経験はないのですから、印象で決めたにしろ、「ごっこ遊び」時代の単なる「憧れ」というものは殆ど消え、厳しい仕事に変化していました。テレビやマスコミからの情報がわたしの看護に対する印象を形作っていたのだと思います。短大に入学してからは、噂に違わず、そのカリキュラムの厳しさに翻弄されました。看護師免許がもらえた時は、後の保健師免許がもらえた時より嬉しかったのを覚えています。これまでの年月を顧みますと、人との出会いが自分の成長を支えるという実感でいっぱいです。この23年間に、さまざまな経験をさせていただきました。そのたびに皆様方や患者さんに御指導いただけたからこそ、その経験が本当の意味で自分の学びにできたのだと思います。人は一人では生きていけないというのは、まさにこのことだと思います。どうぞこれからも御指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

末筆ながら、皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。



就任のご挨拶

看護学専攻 教授 林 優 子

京都大学医学部保健学科に4月より着任致しました。鴨川の桜満開の土手や吉田山周辺を散策しながら、また、研究棟から大文字山の大きさを仰ぎながら、そして、保健学科に入学された学生たちの元気な姿を目にしながら、いよいよ新しい土地、京都での教育・研究生活が始まるのだと、そんな感慨深い思いのなかで京都大学での仕事がスタートしました。

さて、私の経歴を少し紹介させていただきますと、私の教育経験は10年目に入ったところです。それまで約16年間、私は臨床の場で看護師として看護業務や看護管理に携わってきました。昭和51年に新設された筑波大学病院では病棟準備に携わり、日本で初めて導入されたPPC方式（Progressive Patient Care）によって、軽症病棟（検査入院の患者、手術前の患者、ケア度の低い患者）、重症病棟（手術後の患者）、ICUで勤務し、セルフケアレベルに対応した看護を経験させていただきました。前後して勤務した腎臓専門病院（新生会第一病院と横浜第一病院）では、透析医療や腎移植医療に携わり、腎不全医療こそチーム医療という理念の基に新しい病院作りを目指しました。その間、大学院の修士課程において、専門科目の成人看護学と、選択科目であった看護教育学（特論・演習）を学び、大学院で学んだことを教育の場で活かしたいと、博士課程（看護学）修了後に教育・研究の道に進みました。

岡山大学医療短期大学部では4年制大学の準備に、そして改組後の岡山大学医学部保健学科では学部と修士課程で教育を行う機会に恵まれました。臓器移植医療関連の研究では、腎移植者のQOLの研究を長年行ってきましたが、現在はインフォームドコンセントとスピリチュアリティという概念を用いた研究を行っています。スピリチュ

アリティという概念は、日本では緩和医療の領域以外ではあまり馴染みがない概念だと思いますが、1998年にWHOの健康の定義にspiritual well-being追加の提案がなされたことから、今日、関心が高まっている概念でもあります。5年前に、ミネソタ州ロチェスターにあるメイヨークリニックに文部科学省在外研究員として10ヶ月滞在した折、メイヨークリニック主催のスピリチュアリティカンファレンスに参加したことや、肝移植医療チームのメンバーであるチャプレン（病院付け牧師）からスピリチュアルケアの役割についてお話を伺ったことが、スピリチュアリティに関心を抱く大きな動機づけとなりました。ちょうどその当時、臓器移植を希望する患者や家族の方々の苦痛な訴えに手も足も出ない立場に立たされていた私自身の体験も、この概念に関心を持たせた大きな要因のひとつだったように思います。

本大学医学部保健学科では、微力ではございますが、私の臨床経験と教育経験を活かしながら、ユニークな大学院を目指して、諸先生方と共に大学院設置の準備に取り組んでいければと思っています。そして、世界に羽ばたくmedical professionalの人材育成に向けた教育と本学科の発展のために努力していきたいと思っています。今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。



御 挨 拶

検査技術科学専攻 教授 梅 村 晋一郎

大阪の豊中で生まれましたが、小学校1年1学期の1週間を千里丘で過ごしてすぐに、父の転勤に伴い、関東へ移住し、神奈川や東京に住んでおりました。それから半世紀弱、再び関西へ戻って参りました。関西には、現在も、親戚数家族が住んでおります。このような状況でしたので、関西弁は、叔母の口調を頭の中で再生しながらしゃべることにより容易に可能であると考えておりました。ところが、3月までおりました研究所の大阪出身の同僚を相手に試してみましたところ、わざとらしくて不自然なのでやめておいたほうがよいと助言され、ショックを受けてしまいました。そのような心理状態で4月に赴任してまいりましたが、1週間を過ぎました頃にテレビをつけましたところ、教育テレビで関西語講座という番組を放送しておりました。この番組は、関西語を、方言としてではなく標準日本語とは異なる1つの言語として捉え直して習得しようという趣旨でつくられたもののようでした。いくつか役に立ちそうなポイントが紹介されていましたが、中でも光っていたのは、「すべての母音をはっきり発音しようとすると自然と関西語になる」という原理でした。早速、この原理を自分で試してみたところ、確かにその通りになり、100%納得しました。というわけで、皆さんに対して、いきなり関西語を試してみようとするかも知れませんが、そのときは率直に反応いただきたいと思います。

実は、20年ほど前、もとおりました研究所に、アメリカの大学から1人の教授が sabbatical leave を利用しておいでになり、1年間、研究だけではなく、山歩きなどの余暇も一緒に過ごしました。先生自身は日本語を話せませんでしたが、その先生が、日本にいらして数ヶ月後、「日本語はすべての母音を発音すると言われているけれども、あ

なたたちの話すのを聞いていると発音を頻繁に省略しているように思われる。」と言い出しました。そう言われるまで、私自身、すべての母音を発音して標準日本語を話していると思っていましたので、これは驚きでした。このときも、すぐに自分で試してみましたが、確かにその通りと納得しました。まとめますと、標準日本語では、母音を適宜省略あるいは曖昧母音に置き換えて発音するのに対して、関西語では、すべてをはっきり発音するということなのです。これらを通じて感じますのは、自分にとってお決まりの1つの観点だけで見ていると全く気付かないことが、自分とは観点の違う人が見たり、自分自身でも観点を変えて見ると気付くということです。

3月までおりました日立製作所の研究所では、超音波イメージングをはじめとする医用イメージング、超音波治療を中心とする低侵襲治療などを研究開発していました。今回の転職は、これまでの研究分野について自身の観点を変えて見るよい機会になると思っております。超音波治療の研究では、電機系の企業としてはめずらしく頻繁に動物実験をしておりました。また、25年前に卒業しました工学系大学院では、DNAやコラーゲンなど生体高分子の物性とその計測法を研究しておりました。というわけで、理工系にしては、生ものを扱った経験が多い方ではないかと思えます。医師でもなければ、臨床検査技師でもありませんが、狭い意味の理工系の範疇にとらわれることなく、理工系の技術と観点を生かして、保健学科における研究と教育を皆さんと一緒に進めていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。



就 任 挨拶 — 新しい臨床検査医学を目指して —

検査技術科学専攻 教授 船 渡 忠 男

このたび検査技術学専攻に赴任してまいりました。これまでは東北大学大学院医学系研究科に在任しており、主に病院検査部での業務、研究、教育に従事し、教育担当主任として医学部教育にも携わってきました。長い間臨床検査分野の畑にいましたので、今回臨床検査教育のメッカである京都大学に呼んで戴いたことを心より感謝しております。

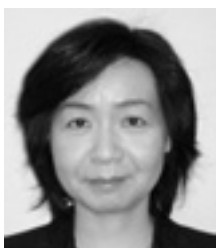
私の専門は「**遺伝子検査**」です。したがって、ここの卒業生にはバイオ全般に関し自信を持って遺伝子を扱える技術と知識を携えて巣立ってほしいというのが一つの願いであります。また、本専攻ではこれからの医療・保健領域を担う医療人「**臨床検査技師**」として成長させるべく尽力したいと存じます。とくに、これからはチーム医療を担う医療従事者としての活躍の場が期待されます。専門基礎科目としての「**医療情報学**」「**遺伝子検査技術**」「**検査情報管理学**」等の講義・実習を通じて、専門的知識および技能を現場で生かすことができる「**臨床検査技師**」を育成していきたいと思っております。京大病院では一山智先生率いる「**感染制御部 ICT**」が全国の範となるチーム医療を展開しておられます。種々の職種が横断的有機的に活動しており、実際の現場に早速参加させていただき、少し慣れましたら、「**遺伝子診療部**」にも関わり、遺伝カウンセリングを通じて患者さんに関わることのできる臨床遺伝学専門の臨床検査技師育成を目指したいと考えております。

一方、ゲノム解析情報を臨床検査の診断に生かすためには、情報科学における臨床疫学や統計・推計学の考え方が必要とされます。これからの医療における検査医学には、これまでの実践的学問を踏まえて、IT技術を駆使した情報科学研究分野への展開が望まれます。そのためには、これか

ら保健学科で学生諸君と新しい臨床検査医学教育の環境を築き上げていきたいと思っております。最近、臨床検査領域はあまり元気がありません。新しい検査医学の分野を創出して本学卒業生がその活力になってもらいたいと期待しております。

さて、初めて東京より西で仕事と生活を始めることになりましたが、関西は臨床検査技師の方たちが大変元気で活動的だと感じています。今後、実際現場で働いている臨床検査技師さんを含めて医療に携わるあらゆる職種の人たちと広く深く関わっていきたいと考えております。それが保健学科の大きな特徴だと思っています。そして検査技術科学専攻として、新たな医学分野への展開において重要なことは、いかに臨床検査の中で専門的な技師を養成していくかです。広く健康全体の領域として、臨床検査医学分野と医療・保健分野との統合・発展を目指して、教育、研究にがんばりたいと思っております。

よろしくお願い致します。



新任のご挨拶

看護学専攻 教授 成木 弘子

今年の桜は4月になってから満開となり、こちらに赴任した直後から一斉に花が咲きました。桜の大好きな私は、鴨川の土手にどこまでに続く桜並木の広がりによって圧倒され、平安神宮のしだれ桜に酔いしれ、疎水縁に時期をずらして咲く花に二度楽しませてもらい、何にもましたプレゼントをいただいたように感じました。

この機会をお借りして、簡単な自己紹介をさせていただきます。

聖路加看護大学を卒業した後、聖路加国際病院内科病棟看護婦を1年、東京都中野区の保健所および訪問指導における保健婦を8年間、長い間実践の場におりました。保健所では「これからの地域保健は、住民と協働しておこなうものだ」と上司からご指導いただき、様々な住民組織と一緒に健康作りシステムや地域ケアシステムづくりを推進する経験を重ねました。公衆衛生医の方からは、保健活動の計画と実践と評価方法（今でいうところのEBH）に関して学ばせていただくことができました。ヘルス・プロモーションの研究者の方からは、ヨーロッパ型の活動手法を教えてくださいました。現在の研究領域（ヘルス・プロモーションを推進する住民組織活動と行政保健師機能）は、これらの実践経験が基盤となって誕生しています。

また、大学教育には、聖路加看護大学と日本赤十字看護大学で12年間にわたり地域看護学、特に行政保健師に関する領域に携わってきました。大学の教員は研究と教育の両方をバランス良くできる能力が求められますが、私はどちらかというと教育にかけるエネルギーの比重が大きいように感じています。思考力の高い学生を育てたいと教材開発や授業の工夫には日々努力を惜しまないようにしています。実践経験で得た事柄を授業に取

り入れながら、実践の楽しさ、研究の必要性や重要性を伝えることができたと思っています。

気がついてみますと京都大学に赴任して2ヶ月半となりました。授業で出会う学生の方々は、他学部の学生の方々も含め授業への参加の態度や反応が良く、また、教室外でも気軽に声をかけられるので、たくさんのエネルギーをいただいています。

現在、看護系大学は全国で130近くになりました。大学卒看護職の質的な充足が求められている中で、優れた研究者やリーダーが切望されています。京都大学で学んだ学生の方々が、世界の看護のリーダーとして羽ばたいていくお手伝いができたらと思っています。不慣れなことも多く、至らない点もあるかと思いますが、みなさまからご助言をいただきながら努力してまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

平成17年度 医学部保健学科 新入生合宿研修の報告

学生厚生支援・環境保全委員会

教員と学生、学生相互の対話と交流は、教育分野を問わず基本的かつ重要な課題の一つである。そこで、本学科では新入生を対象に課外での研修により、専攻を超えた学生間、及び在学生や教職員との親睦を深めること、またガイダンスを通じて大学生活へのスムーズな導入を図ることを目的に、平成17年教育・厚生支援事業の一環として一泊合宿研修を実施した。その結果を報告する。

実施概要

- 目的：①ガイダンスにより大学生活へのスムーズな導入を図る。
 ②専攻、学年を超えた学生間、学生と教員との交流と親睦を深める。
 ③健康科学を学ぶ保健学科の学生として、健康人間学の未来を語りあい、ともに学ぶ者としての協調と自学自律のこころざしを高める。
- 日時：平成17年4月23日(土)11:30～24日(日)12:30
- 参加者：保健学科 新入生 131名 保健学科2回生 13名
 保健学科教員・事務職員 27名(内10名日帰り)
- 研修地：花背山の家 財団法人 京都市野外活動振興財団事業課

研修結果

本年度の合宿は前年度の反省を踏まえ、目的の1つとして履修ガイダンスを取り入れた。また、学生間、学生・教員間の交流をより促進するためにプログラムを工夫し、さらに2回生、13名の協力を得て準備体制を整えた。準備期間は入学式から2週間足らずであったが前年度に比べて特別な困難もなく準備はスムーズに行われた。

合宿当日、学生は主体的に集合時間1時間前に第3大教室に集まり、グループごとの打ち合わせを行った。現地には無事に予定時間より早めに到着したが、合宿場所に不慣れなこと、担当教職員の役割分担などの不徹底などがあり、予定時間を多少遅れて入所式に入り1泊2日間の合宿が始まった。

合宿の成果に関しては学生へのアンケート調査の結果を基にお示しする。

1. アンケート結果

：調査表の集計結果から

入学ガイダンスは役立った プログラムについて(良かった、とても良かった)	66%	合宿研修の目的—学生間の交流について (できた、非常によくできた)	
①合宿研修施設	57%	①バスの中では会話が弾んだ	58%
②全体のスケジュール	33%	②グループ討論で盛り上がった	51%
③日数	52%	③夕食準備でうち解けた	81%
④時期	48%	④他専攻の学生とも交流できた	82%
⑤プログラム全体の満足度	54%	合宿研修の目的—今後の学生生活に向けての期待等 (持てる、非常に持てる)	
合宿研修の目的—教員との交流について (できた、非常によくできた)		①大学生活への自信は…	45%
①バスの中では会話が弾んだ	8%	②健康科学を学ぶことへの期待は…	71%
②グループ討論で盛り上がった	16%	2回生の先輩学生の支援は役に立ったか (：役に立った、：非常に役に立った)	76%
③夕食準備でうち解けた	15%		
④他専攻の教員とも交流できた	12%		

：アンケートの自由記載から

- ・施設はとてもきれいでよかった。寒かったが風呂はよかった。
- ・自由時間が少ない。もっと雑談したかった。
- ・グループワークの相談時間が少ない。ゆとりのある日程にしてほしい。
- ・リクリエーションが少ない。アスレチックがよかった。
- ・友人ができ心強い。同士で話ができ勉強になった。
- ・二回生が話しやすく安心した。仲良くなれて、勉強になる話も聞いた。
- ・京大は個性的で、みんなオープンですぐに打ち解けた。
- ・普段の生活ではわからない面を見ることができ、楽しかった。
- ・代休がないので月曜提出のレポートがきつかった。
- ・専攻別ガイダンスで教員の言葉がうれしく、とてもやる気が出た。
- ・教員との話す機会が少なかった。

2. 合宿委員の反省(1,2 回生、教員)

二回生の役割に関して、今後の合宿の改善点など

- ・二回生の参加目的が曖昧だった。
- ・二回生を中心に一ヶ月前から準備もできる。下見など二回生も準備の段階から参加すべきだ。一週間前からリーダーは集まって検討を開始する。
- ・二回生とあまり交流ができなかった。もっと一回生の中に入ってきてほしかった。
- ・入学式後の懇親会時に、二回生から一回生に研修の説明を行ったらどうか。
- ・歓迎会のグループは専攻を超えたグループになっているので歓迎会からのグループで合宿するとよいのではないか。

グループワークに関して

- ・グループワークでのテーマが漠然としている。情報が伝わりにくかったが、テーマがわかっているならば事前に調べることもできる。
- ・準備も必要かもしれないが今回のグループ発表は皆の創意工夫が見られて昨年よりよかったような気がする。面白かった。



その他に関して

- ・伝達が錯綜したり、遅れて混乱した。
- ・野外炊飯はよかった。



3. 学生厚生支援・環境保全委員会の合宿研修に対する反省と今後の課題について

学生はプログラムに積極的に参加し、学習と交流の時間を楽しんでいた。また、アンケート結果からも合宿の目的であった履修ガイダンス、および、学生間の交流、今後の学生生活への期待等で高い評価が得られていた。しかし、前年度と同様に教員・学生間の交流が不十分との結果が見られ、課題として残った。

学生へのアンケート結果および合宿委員による反省を踏まえて、学生厚生支援・環境保全委員会としては以下のような反省と今後の課題をまとめた。

- 1) 本年度の研修はほぼ目的を達成した。研修内容や施設は目的を達成するために適切なものであった。
- 2) 研修目的としての「健康科学」についての理解をより確実にするために、学科長あるいは専攻代表者のお話の時間を持つことも今後の検討課題である。
- 3) 二回生に対する役割を明確にし、合宿の準備段階の最初から協力を得る。できれば今後上級生が合宿の強力な推進者となるよう育成して行く必要がある。
- 4) 学生間のよりスムーズな交流促進のためには、合宿のグループ編制を入学時歓迎会のグループ(他専攻混合)で実施する。

以上

平成17年度 医学部保健学科入学試験結果

専攻・日程		募集人員	志願者数	合格者数	入学者数
看護学専攻	前期	63	110	67	60
	後期	7	73	14	10
検査技術科学専攻	前期	30	73	31	31
	後期	7	72	8	8
理学療法学専攻	前期	15	56	15	15
	後期	3	31	3	3
作業療法学専攻	前期	15	41	15	15
	後期	3	27	3	3
小計	前期	123	280	128	121
	後期	20	203	28	24
合計		143	483	156	145

人 事 異 動

発令 年月日	職名	氏名	所属	異動事由
平成 17. 3.31	教授	中井義勝	看護学専攻	定年退職
〃	教授	森永敏博	理学療法学専攻	退職
〃	助手	片山由美	看護学専攻	退職
〃	総務掛長	中川好昭	事務部	定年退職
17. 4. 1	教授	林優子	看護学専攻	転任(岡山大学医学部教授より)
〃	教授	成木弘子	看護学専攻	採用(日本赤十字看護大学助教授より)
〃	教授	梅村晋一郎	検査技術科学専攻	採用(株式会社日立製作所中央研究所より)
〃	教授	船渡忠男	検査技術科学専攻	転任(東北大学大学院医学系研究科助教授より)
〃	総務掛長	加藤泰久	事務部	転任(総務部総務課文書企画掛長より)
〃	会計掛長	北野和男	事務部	転任(再生医科学研究所会計掛長へ)
〃	会計掛長	片山貞子	事務部	転任(工学研究科総務課桂Aクラスター事務区会計掛長より)
〃	教授	江川隆子	看護学専攻	看護学専攻長
〃	教授	天野殖	検査技術科学専攻	検査技術科学専攻長(再任)
〃	教授	坪山直生	理学療法学専攻	理学療法学専攻長(再任)
〃	教授	小西紀一	作業療法学専攻	作業療法学専攻長(再任)

医学部保健学科・医療技術短期大学部日誌

12. 2	若手将来計画検討委員会	3. 16	若手将来計画検討委員会
12. 3	医療短大「消防訓練」	3. 17	平成 16 年度卒業・修了式
12. 8	研究検討委員会	3. 21	中井義勝教授退官記念祝賀会
	広報委員会保健学科紀要 健康科学部会	3. 22	臨時教授会議
	学術委員会健康科学集談会部会		拡大教授会議
12. 9	施設管理・建築委員会	3. 23	後期日程試験合格発表
	将来計画検討委員会	3. 24	将来計画検討委員会
	教員会議・教授会議		施設管理・建築委員会
12. 10	健康科学研究会	3. 26	3 大学チーム医療フォーラム
12. 22	拡大将来計画検討委員会	4. 5	若手将来計画検討委員会
	入学者選抜検討委員会	4. 6	専攻科入学式
12. 24	健康科学集談会	4. 7	保健学科新入生歓迎行事
12. 27	若手将来計画検討委員会		臨時将来計画検討委員会
1. 6	専攻科入学者選抜方法検討委員会	4. 14	教員会議・教授会議
1. 7	専攻科入学者選抜試験	4. 15	学生厚生支援・環境保全委員会
	拡大将来計画検討委員会	4. 19	学生厚生支援・環境保全委員会
1. 12	研究検討委員会	4. 21	診療問題検討委員会
1. 13	入学者選抜検討委員会	4. 23,24	保健学科新入生合宿研修
	学術委員会	4. 26	学術委員会
	教員会議・教授会議		教務・教育委員会
1. 15,16	大学入試センター試験	4. 28	将来計画検討委員会
1. 17	学生厚生支援・環境保全委員会		大学院設置準備委員会
1. 19	若手将来計画検討委員会		施設管理・建築委員会
	図書委員会		広報委員会ホームページ部会
1. 24	専攻科入学者選抜試験合格発表	5. 9	広報委員会
1. 27	将来計画検討委員会	5. 10	若手将来計画検討委員会
	入学者選抜検討委員会	5. 12	教員会議・教授会議
2. 3	中井教授・森永教授最終講義		入学者選抜検討委員会
2. 4	入学者選抜検討委員会	5. 18	研究検討委員会
2. 9	研究検討委員会	5. 26	入学者選抜検討委員会
2. 10	施設管理・建築委員会		将来計画検討委員会
	教員会議・教授会議		図書委員会
2. 17	拡大教授会議		将来計画検討委員会・大学院設置
2. 23	将来計画検討委員会		準備委員会合同委員会
	若手将来計画検討委員会	6. 2	学術委員会
2. 25~27	入学者選抜学力試験（前期日程）	6. 8	研究検討委員会
3. 2	学生厚生支援・環境保全委員会	6. 9	教員会議・教授会議
3. 7	臨時教授会議	6. 15	学生厚生支援・環境保全委員会
	教務・教育委員会全体会議	6. 23	将来計画検討委員会
3. 9	前期日程試験合格発表	6. 23	入学者選抜方法検討委員会オープンキャンパス部会
	研究検討委員会	6. 28	広報委員会ホームページ部会
3. 10	教員会議・教授会議	6. 30	広報委員会保健学科紀要 健康科学部会
3. 13,14	入学者選抜学力試験（後期日程）		

京都大学医学部保健学科広報部会

あ と が き

平成 17 年度第 1 号の広報をお届けします。

平成 16 年度末に 3 名の先生方が退職なさいました。中井先生からは、ご著書「memoirs」の補遺として、内科から医療技術短期大学部に移られた当時のいきさつ、看護での研究内容などについてお寄せ頂きました。森永先生には、医療専門職の将来についての京都大学への期待を綴って頂いています。片山先生のご投稿は看護師を志望なさった原点を中心に、ほのぼのとした思い出を書かれたものです。先生方のご貢献に感謝いたすとともに、益々のご発展をお祈り申し上げます。

年度が変わって 4 名の先生方が教授として着任されました。それぞれの専門分野での博識と京大

での今後のお仕事への熱意が伝わる文章を頂戴しました。どうぞよろしく御願い致します。

現在我々は 3 年制から 4 年制への過渡期にあります。また近い将来の修士課程設置も見据えて、ともすると人手不足、時間不足、資金不足、設備不足を実感してしまいます。異なった分野の専門家の集合体である本学科の特性を活かし、より良い医療職を養成する教育、より良い医療を達成する研究という共通目標に向って、力を合わせましょう。

広報委員会・広報担当 坪山 直生